

---

# 夢十夜

柳野蛙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢十夜

### 【Nコード】

N9399X

### 【作者名】

柳野蛙

### 【あらすじ】

分かる人には分かると思いますが、夏目漱石の傑作掌篇『夢十夜』をベースにした現代の奇譚集です。ところどころ擬古文調になっています。当然ですがこの作品はフィクションです。実際の事件、人物、組織等とは何ら関係ありません。

## 第一夜

### 第一夜

廢墟の岬で一人釣りをする男がいるという。

聞けばその男はある時から来る日も来る日も釣り糸を垂れ、一向に釣果が上がらぬことを意にも介さずひとり海と向き合っているという。私は其の男を一目見てみたいなと思い、土曜の朝まだ薄明のうちに街を出た。揚々と二輪車を飛ばし、四半刻程で山へ続く道へ出た。その頃になると空も幾分明るくなってきていて、坂を上る道すがらふと背後を見下ろすと、丁度東の山の端から陽が昇る所であった。私はその強烈な朱に目を顰め、今日はとても熱くなりそうだなと思った。

海に着くと、確かに岬の先で釣りをしている男がいた。噂に聞いたとおり、その男はつづら折りになった岬の先端でひとり釣り糸を垂れていた。男はあぐら姿で尻を此方に向け、その体はびくりとも動かなかった。竿の舳先からだりと垂れ下がった釣り糸が、陽炎のようにゆらゆらと上下している。陽光に照らされた男の影は、水面に浮かぶ一艘の小舟のようでもあった。私は成程中々どうして絵になるかと暫く見入っていたが、そのうち、私の中に或る疑念が浮かんできた。

はて、こんな所に岬などあったらどうか。

此処は先達で大津波で廢墟となるより前は、只の浜辺であつたはずである。灯台もなければ消波堤すら見えぬ、どこにでも有りふれた砂浜であつた。さもありません、漁師の船も泊ることなどなかったわけであるから、此処に岬などある由もないのである。そんな単純なことをどうしてこの嘶を聞いたときに思いつかなかったのか我ながら不思議であつた。私は街の往来でこの嘶を聞いたのだけれど、その時いま目の当たりにしている光景がパッと浮かんできたものだ。

から、成程そんなことも在るのかと一人得心いつてしまったのだ  
た。

しかし、実際問題として岬は此処こゝに在る。此れ如何に。

私は兎も角男に話を聞いてみることにした。浜の白砂の上で二輪  
車を降りたのだが、細やかな砂粒に輪胎タイヤの足が取られてしまつて中  
々自立しない。結局面倒になつて私はその二輪車を捨て置き、岬に  
向かつて歩き出した。

廢墟の浜辺は想像よりも騒々しい。浜辺のお供といえば流木、椰ヤ  
子しの実、何処いずこの物かとも知れぬがらくたの数々……と枚挙に暇がな  
い。だが、それらの趣は明朗の海の傍そばにあつての物種である。もと  
より数も少ない。然しかしながら今や私のズック靴の裏には何やら笹暮ささぐれ  
てシユロの葉の様になつた板の破片が散乱していて、趣などどこに  
もない。何より磯の匂いがいつもよりきつい。これは恐らく長らく  
潮に浸かつていた木々の腐敗した匂いだらう。

また、辺りを見やれば緑に苔むした陶器の破片もそこに散ら  
かっている。私はあゝ此処こゝにはかつて人家があつたのだなと無常感  
に襲われた。形ある物はいづれ壊るとは云いえども、このような形  
で破局を迎えることになるとは誰しも思いも寄らないだらうと思  
つた。

さらに歩みを進め、岬の尾の部分に着いた。近寄つて見てみると  
私が岬だと思つていたものは帯のように積み上げられた瓦礫の山だ  
つた。遠くから見れば幾分不恰好とはいえそれなりに岬の形を成し  
ていたから気がつかかなかつたのである。その瓦礫でできた岬は考え  
ていたよりもずっと凸凹していても歩けたものではなかつた。  
岬の周りの海の中を覗き込むと、驚くほど底が浅く、中には同じよ  
うに瓦礫の山がうず高く積もっているようだった。どうやらこの瓦  
礫の山が帯のように岬を作っているのではなく、元は人家が並んで  
いた場所に津波が押し寄せてその総てを塵芥ちりあくたに還してしまつたとい  
うことのようにだった。つまり、私が岬だと思つていた部分は堆積し  
た瓦礫が水面から顔を出した、丁度尾根のようになつた部分だった

のである。

それにしてもまだ水が引かぬところを見ると、相当の数の家々がここに沈んでいるようだ。一体元々の海岸線は何処にあったのか、もうまったく分からない。

私は薄氷を踏む思いで岬の先端まで行き着くと、尚釣りを続ける男に向かつて、釣れますかと問うた。近くで見ると、男は随分小柄な体軀たいくをしていた。深く被った編笠のせいで目元は見えないが、浅黒く日焼けした肌を見るに、百姓のようでもあった。筋張った顎には砂鉄のような髭が生えており、その所々に見える白髪が男の歳を物語っていた。格好はというと、鶯色うぐいすいろの着流しに昆布のような兵児へこ帯おびをだらしく締め、腰のところには今どき珍しく竹で編まれた魚籠くをぶら下げていた。おまけに海に向かつて伸ばしている釣竿も、継ぎ目のところに漆が塗られた竹製の小継竿こつぎせおだった。一体全体この男はいつの時代の人間なのだと私は呆れてしまった。だが、場所が場所だけに妙な説得力があった。

私の問いにその男は振り向きもせず、いいやと答えた。私はそれならどうして止めないのですかと聞いてみた。相変わらず男は此方こちらを見ようとしなくてそういうものだからさ、と云いった。そういうもの？ 確かに釣り好きの友人などは「釣りとは即ち君、待つことなのだよ」と語っていたが、それは少なからず魚が泳いでいる場所での話であらう。素人目に見ても、此処ここには魚どころか田螺たにし一匹たりともいないであらうことは容易に想像できた。「此処ここに魚はいないと思いますがね。何たって魚が棲める隙間すきまつてもものがまるでないんだもの」私は少し意地悪な心持ちでそう言ってみた。さて男はなんと返すだろう。男は左手で笠の位置を無造作に直すと、「知ってるがなア」と興味なさ気に答えた。意外な答えに私は興ざめしてしまった。そうして何度か思いついたことを男に問いかけてみたが、初めだんまのうちは無愛想ながら答えていた男もそのうち愛想を尽かしたのか黙だんまりを決め込んでしまった。これにはさしもの私も退屈になって、黙だんまって海の向こうを眺めることにした。

どれほど時が経つただろうか、気がつくといよりは薄暗くなつていて、いつの間にか水面の彼方に陽が沈もうとしていた。結局、記憶にある限り魚は一匹もかかることはなかった。それどころか垂れた釣り糸を終ぞ上げることもなかった。空と海の間に陽が消えてしまふと、いよいよ辺りは闇に包まれた。すると、それまで石像の様にジツとしていた男がやあら竿を上げると、針の先を検めることもなしに、さつさと帰り支度を始めてしまった。私はそれ見たことかと内心男を罵つてみたが、股引を履くように淡々と小継竿を畳んでいく男の姿には、その釣果にも関わらず悲壮感というものがまったくなかった。男は一日中横に立っていた私には目もくれず、くると踵を返して岬を後にした。私はなんだか切なくなつて思わず「嗚呼、莫迦なことを！」と叫んでみた。男は此方を振り返ることもせず、瓦礫の上をのしのしと歩き続ける。岬には、ただ押し寄せては引いていく潮のざざあという音ばかりが響いていた。すると、どこからともなく海猫が飛んできて私の頭のすぐ上を掠めていった。私はワツと声を上げて瓦礫の上に尻餅を付いた。海猫は蛇行した岬をなぞるように飛んでいき、男の魚籠に嘴を突っ込んだ。これには男も驚いたようで、ばたばたと腕を振るつて狼藉者を振り飛ばした。海猫はくええと鳴いてどこかに飛び去ってしまった。しかし、何しろ足場の悪い場所での出来事である。男はたちまちバランスを失った。私は思わずアツと声を上げてしまった。水の底には先の尖った柱だの粉々に砕けた瓦だのが山ほどあるのだ。幾ら水の中とはいえ、そんなところに落ちてしまつては無事では済まない。なんとか走りだそうとしたものの、海猫に襲われた際に足の何処かを挫いてしまつて満足に走れそうにない。そうこうしている間に男は遂に背中から水面に落ちてしまった。私は目を覆いたい心持ちになつたが、何故かその様子が緩やかに見えた。時の流れが緩慢になつたかのようだった。

次の瞬間、ばしゃあんという大きな音と共に白い飛沫が高々と上がった。男は声も上げずに水の中でジタバタと手足を動かしている。

南無三、私はその場で合掌した。廃墟と化した夜の岬に、静かな月の光とけたたましい水音が響く。その様子は先刻まで私の隣に座っていた朴念仁<sup>ぼくねんじん</sup>とはおよそ同じ男とは思えない必死さであった。男のその様は、まるでいざ飛び立たんとする白鳥のようにも思えた。その水音は猛々<sup>ただだけ</sup>しく、その飛沫は神々<sup>じんじん</sup>しく――。私は固唾を飲んでその様子を見守っていた。

しばらくして男は瓦礫の地表に手を掛け、ずずずと水から上がってきた。端から見ても満身創痍、およそ自らの足で立つことも覚束<sup>おぼつ</sup>無い有様<sup>かな</sup>だった。

私は跛を引き引き男の元に駆けつけると、肩を貸そうと地面に膝を付いた。

しかし、男は頑としてそれを受け入れなかった。

無言で立ち上がると、ふらついた足でまた歩き始めた。

「そんな体で何処へ行こうというのかね！」私はまた大きな声を上げた。男は答えなかった。私は地団駄を踏んだ。挫いた足首がずきつと痛んだ。その間にも男の姿は遠くなっていく。私は観念して、すぐるような思いでこう云<sup>い</sup>った。

「……あんたは明日も此処<sup>ここ</sup>で釣りをするのかい！」

正直なところ、私はもう答えなど期待していなかった。しかし、意外にも男は私の問いに応じた。男は相変わらず覚束<sup>おぼつか</sup>無いその足取りを止めることなく、「ああ」とだけ云<sup>い</sup>った。やがて男の姿は見えなくなった。

私は一人真つ暗になった岬に取り残された。訳のわからぬことばかりであったが、不思議と私の心は満ち足りていた。

たとえ瓦礫の上澄みであっても、やはり岬には釣り人が必要なのだと思つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9399x/>

---

夢十夜

2011年10月26日08時15分発行